

最近のロシアのマルクス論争によせて（Ⅲ）

小檜山 政 克

目次

- I. ガイダール、マウ両氏によるマルクス主義の史的分析
（本誌第54巻第6号）
- II. ガイダール、マウ両氏の論考をめぐる論争
 - 1. ブズガーリン氏らの論文「リベラル派マルクス主義は我々に必要か？」
 - 2. 『経済の諸問題』誌討論会「マルクスの遺産と現代経済学」
（以上を本誌第55巻第2号に掲載したが本号ではこの討論会の続きを掲載）
- III. 論争によせて
（続いて掲載の予定）

II. ガイダール、マウ両氏の論考をめぐる論争（続き）

2. 『経済の諸問題』誌討論会「マルクスの遺産と現代経済学」（続き）

ロシアでは科学アカデミー経済研究所の雑誌『経済の諸問題』2004年5、6月号にガイダール、マウ両氏の「マルクス主義：科学的理論と“世俗的宗教”のあいだ（リベラル派の弁明）」と題した長大な共同論文が発表されたが、この論文はただちに激しい論争を巻き起こした（同論文は本誌第54巻第6号で紹介した）。本誌第55巻第2号ではこの論争のうち同誌2004年7月号に発表されたA. ブズガーリン、A. コルガーノフ両氏の共同論文「リベラル派マルクス主義は我々に必要か？」の内容を詳しく紹介し、さらに同誌2005年1、2月号に掲載された「マルクスの遺産と現代経済学」と題する同誌編集長L. アバルキン氏司会の討論会の発言のあらましを検討した。さて本号ではそれに続けてこの討論会の発言の後半の部分を紹介する。（なお本稿のこの討論会の発言の紹介、検討は、紙数の関係もあって、各発言の要点、趣旨を理解するのを主眼としているものであるから、明示した箇所以外にも省略した部分がたくさんあることを、念のため申し添え、ご了承を乞うものである。）

V. クリコフ（経済学博士、ロシア連邦労働社会発展省労働研究所副所長）

社会科学は現代社会の全体像を、経済学は現代経済の全体像を提示しなければならないがそれが出来ていない。社会科学はまた社会発展の基本方向を明らかにしなければならない。ガイダール氏らはマルクスの理論の中で最も興味深く重要なものは歴史分析の方法としての歴史哲学と経済史の理論だとし、狭義のマルクスの経済理論そのものはあまり重要ではないとしているが、『資本論』はブルジョア社会の全体像と運動法則を解明した経済的カテゴリーと法則の体系であ

って、経済思想史上の不朽の名著である。またガイダール氏らはマルクスの理論は革命を目指したものだという点を強調しているが、革命か進化かというのは改造のメカニズムの問題であって、重要なのは何のための改造かということである。マルクスとエンゲルスは一人一人の人間の全面的な発達に必要な条件を作り出すために社会の改造が必要だと考えたのである。そのための方法は二次的な問題である。

ガイダール氏らの長大な論文は何のために書かれたのか。それは最後の2ページを読むだけで分かる。彼らの言いたいことはただひとつ——現代を支配しているのは自由主義だということである。しかし今はその他にもいろいろな社会発展の方向があるのであって、自由主義はその一つにしか過ぎないのだ。

V. メジュエフ（哲学博士，哲学研究所主任研究員）

I. カントの『純粋理性批判』は数学と物理学がいかにして存在するかという問題を取り上げた書物であるが、カントはどのような科学も人間の理性の究極の目的や欲求に答えることはできない、何故ならその答えは科学が扱い得る経験の範囲の外に、つまり自由の領域にあるからだということを示そうとしたのである。「経済学批判」というサブタイトルをもった『資本論』の中でマルクスも経済学について同じようなことを証明しようとしたのである。『資本論』のサブタイトル「経済学批判」というのは「経済的理性批判」と名付けることもできよう。ここで「批判」という言葉は経済学の否定という意味ではなく、その理性的な限界、領域の確定という意味である。

マルクスはなんらかの新しい経済理論を作り出そうとしたのではなく、商品、貨幣、剰余価値、資本といった経済学の基本的カテゴリーはあらゆる時代、国民に通用する絶対的真理ではなく、一定の歴史的範囲にのみ通用する相対的真理に過ぎないということを証明しようとしたのである。それらをどの社会の説明にも通用する鍵と見做したり、全ての歴史学の基礎としたりしてはならないのである。

マルクスは何よりもまず資本主義の批判者であったが、マルクス以前から資本主義は批判されていたし、階級闘争、革命、さらにはプロレタリアートの独裁（この言葉をマルクスはバブーフ主義者達やブランキスト達からとった）ということもマルクスが始めて言い出したのではない。社会主義思想、共産主義思想もマルクスに始まったものではない。マルクスの新しさ、独創性というのは彼の資本主義批判の方法にあった。それは社会批判的、弁証法的と言ってもよいが、しかし歴史的方法と呼ぶのが一番正しいだろう。

マルクスの資本主義批判の特徴は、現実には観察される資本主義そのものに対する批判ではなくて、その社会意識とくに学者達の意識つまりは経済学に対して向けられた批判だったということである。『資本論』における資本主義の批判は資本主義についての科学の批判つまりは経済学の批判であった。その意味は経済学は歴史的な限界があるものであって、社会の科学的認識の普遍的形態ではないということであった。従ってマルクスは人類史解明に当たっての経済決定論の批判者であったし、またこのような解明をなしうるとするような経済学の批判者であった。経済学のカテゴリーの歴史性を否定することはそれらに恒久的な性格を付与することであって、マルクスはそれをブルジョア的なものとして克服すべきとした。自己の学問の絶対的真理性を従ってま

た資本主義的生産方法の絶対的真理性を主張する経済学者達に対してマルクスは闘ったのである。このことを理解しないと20世紀のマルクシズムの運命を理解できないだろう。20世紀におけるマルクシズムの継承の特色はそれを進めたのが現代経済学理論ではなくて社会学的研究のフランクフルト学派やサルトル的な実存主義のような哲学思想や社会思想であったことであって、彼らは全ての現代経済学者達よりもずっとマルクスに近かったのである。

マルクスの考え出した歴史の唯物論的理解というのは、歴史を思想の歴史としたり、また専ら経済の歴史としたりするような見解を是認するものではなく、反対にそれを否定するものなのである。このどれもが人間そのものの歴史を見落としている。マルクスが経済学を批判したのは何か彼が作り出した別の経済学の立場からではなくて、彼のいう歴史の唯物論的理解という歴史学の立場からなのである。このような科学的な歴史学のみがそもそも人間とは何であるかを判断することができるのである。レーニンが『資本論』はマルクスの単なる経済理論の叙述ではなくて史的唯物論の叙述であるとしたのは、それほど間違っていない。またこれまで西欧でマルクスが経済学者というよりも社会思想家と見做されてきたのも理由のあることなのである。

周知のようにマルクスは自分の主要な発見を労働の二重性についての学説であると考えていた。この学説に基づいてこそ商品、貨幣、剰余価値そしてあらゆる形態の資本そのものの発生を説明することができたからである。実はこれらのカテゴリーのどれもマルクスが考え出したものではない、それは彼がスミス、リカードなどの経済学の古典から取り入れたものである。マルクスはそれらが永久に存在しているものではなく、一定の歴史的状況のもとで発生したものだと考え、その発生を発見しようとしただけなのである。もちろん労働の二重性の発見を経済学上の発見と呼ぶこともできるけれども、それは実は経済学的というよりもむしろ歴史学的（私は“先験的”とさえ言いたい）論拠を有するものであって、経済学的な分析が可能な経験からとったものではなくて一定の学問的前提に基づいた歴史理論からのものである。そもそもどのような経済的経験に基づく知識が抽象的労働の存在を立証できるだろうか？ このカテゴリーが現代経済学の概念のなかに入っていないのはそのためではなからうか。この本質的には非経済学的カテゴリーを経済学のなかに入ることによってマルクスはこの学問とその全カテゴリーの歴史的、過渡的性格を立証することができたのである。マルクスがこの組み入れをすることが出来たのはなぜか。ここで本題に近づく。

マルクスにとって歴史とは、人間の労働がただ単に人間に役立つ物や思想を作り出すだけではなく、物や思想の姿かたちの中にある人々との関係つまり社会そのものを作り出す力をもっているからこそ出来上がったものなのである。マルクスは人間がただ単に社会関係の結果ではなくてその創造者である、すなわち社会的存在としての自己の創造者であることを発見したのである。マルクスにとって歴史とは人間労働による社会的人間の生産なのである。しかしながら労働過程で人々との結びつきを作り出す人間の能力は、社会的分業の存在のためにカムフラージュされて、長い間物（商品）や思想のかたちで現れてきた。労働はこのような転倒した（或いは疎外された）かたちで歴史哲学や経済学のなかで定着させられたのである。このような労働の疎外の極端なかたちが、マルクスが直接的に社会的な労働と対比して抽象的労働と名付けたものなのである。マルクスが提起した問題は、理論上だけではなく実際上にも労働の疎外された（抽象的な）性格を克服して、労働をその本来のすがたである人々との関係の生産、つまりはこのような関係のなか

での人間自身の生産にしていかなければならないということだったのである。しかしこのためには人々が経済的必要だけで労働することを乗り越え、また理論的には経済学的思考の枠を乗り越えることが必要なのである。マルクスによれば“自由の王国”は経済的必要の彼岸に始まるのである。

問題はもちろん経済の役割を否定することではない、そんなことは空想的だし有害でもある、問題は社会的労働は専ら経済学のカテゴリーだけに表わされるものではないということである。つまり経済生活と社会的、人間的な生活とが同じというわけでは全くないのである。経済的効率性というのは例えば文化、道徳の領域での人間の利益と、また自由な個人の創造的自己実現と言う人間存在とそのまま一致するものではない。どんな労働をも抽象的労働と対比させたり、またどのようなかたちの社会的富に対しても貨幣をその尺度としたりすることが出来るであろうか。自然や文化（芸術、科学、教育）におけるすべてのものを貨幣で計ることが出来るだろうか。もし出来るとするなら、マルクスの言ったことはすべて忘れて安心したらよい、しかしもしそうでないのなら、それを帳消しにするのは早すぎるだろう。資本主義が現在もし危機にあるとすれば、それは資本主義が自己の権限を文化、自然の領域にまで及ぼし、それらを貨幣で取り扱う対象としようとしているからだ。今日西欧で頻りに報じられている精神的、環境汚染の危機は、資本のこの領域への侵犯のはっきりとした結果なのである。

さてこうなるとマルクスにとって共産主義とは遠大な理想、うち建てられるべき状態、目標、または歴史の最終段階ではなくて、物や思想という転倒したかたちから解放された歴史そのものなのである。共産主義とは常に存在していたが、ある時期まで人々の目から隠されていたものなのである。だから社会という空間を貨幣と資本の権力から（思想のなかだけでも）解放しさえすれば、我々はマルクスが共産主義と名付けたものつまり人間が自分たちの関係すなわち自分自身の創造者として登場する自由の空間を発見できるのである。これまでのところこのような空間は文化の領域にだけ存在しているのだが、共産主義運動の課題はこれを社会全体の規模にまで広げることなのである。言い換えれば共産主義とは市場の法則ではなくて文化の法則、つまり人間の歴史そのものの本質と論理に従って生きる社会のことなのである。そのためには何が必要か。それは人間の社会生活の中の主要な時間を労働の時間ではなくて自由な時間にするということだというのがマルクスの答えである。自由な時間では人間は賃金やパンのために働くのではなくて、天賦の才能や獲得した知識に応じて働く。マルクスにとって社会進歩の主要な指標は総生産の増加ではなくて、自由な時間の増加なのである。だから共産主義とは人間の貧困からの解放の問題ではなくて、人間を必要労働から解放する問題を解決するものなのである。このような社会は全くのユートピアであろうか。いや西欧先進国では生活水準と自由時間の増加の結果 NGO など様々な動機で生まれた高度な市民的、政治的活動が出現している。これこそがマルクスが夢見た社会活動の端緒なのである。共産主義という言葉が気に入らなければ別の言い方をしてもよいが本質は変わらない。問題は人々が既存の状況に順応するのではなくて、その時の文化水準に応じて状況を自分に合わせて作り出していく社会だということが大事なのである。

M. ヴォエイコフ（経済学博士，経済研究所前任研究員）

1991年はマルクス主義の正しさを証明した。マルクスの理論に従えば遅れた一国で社会主義を

建設することは不可能なのだからである。

ガイダール氏とマウ氏は右翼リベラルであって我が国における自由主義イデオロギーの弁護者である。ではリベラル派マルクシズムというのは存在するのだろうか。私は存在すると思う。その創始者はE. ベルンシュタインで、ロシアではメンシェビキがそうであるが、Yu. マルトフが最も一貫したりベラル派マルクシストであった。私は真面目なりベラル派は社会主義の“陣営”に移るに違いないと思う。何故ならば自由主義は社会主義の“父”であり、社会主義は自由主義の思想を受け継いでいるものだからだ。

この論文の筆者達は自分たちを右翼的、保守的リベラルであるとしている。定義に従えば彼らは社会主義でもマルクシズムでもない。それではかれらに何故マルクシズムが必要なのだろうか。20年前ならばマルクシズムを受け入れない経済学者は職から追われただろう。しかし今何故リベラル派にマルクシズムが必要なのか。一体右翼自由主義はマルクシズムなしでは生きられないのだろうか。

【『経済の諸問題』誌ではここでG. グローベリ氏（経済学博士候補、『A. ボグダーノフ国際研究所通報』誌編集長）の発言を掲載しているが本稿では紙数の関係で同氏の発言は省略する。】

V. クドロフ（経済学博士、国立経済大学教授）

ついにロシアの経済学者達はマルクシズム理論一般及びその中での経済理論のプラスとマイナスについて、公然たる自由な討論を開始するにいたった。この討論の資料は我々年長の世代だけではなく、マルクシズムについて何も知らずまたあまり知ろうともしない若い人達に有益だろうと思う。このような討論はたいへん大きな社会的反響を呼び起こすだろうと考える。

私はソビエト政治経済学のツァゴロフ学校の生徒ではあるが、ガイダール氏らの立場に賛同したい。この20年の間多くのことを考え直してみなければならなかった。もちろん哲学者達がカントを引用して、科学はマルクスの正否について決定を下すことはできないというのは、そのとおりだろう。けれども現実生活と実践は理論や思想の正否についての古典的な基準である。もちろん“ボリシェビキ的”マルクシズムはマルクス、エンゲルスの古典的理論とは違ってはいたかもしれないが、ソビエト経済がマルクスとレーニンの構想に従って建設されたことは、議論の余地がないし、またその違いは原則的なものではないと私は思う。

我が国には党、経営、国家安全保障という縦断的権力に基づいた絶対的に出口のない、見通しのないソビエト式経済モデルが形成されていた。産軍複合体のものを除いて我が国の製品の競争力、品質は論外で、競争力、採算性の基準は簡単、すなわち計画課題の遂行ということに尽きていた。どれほど費用が掛かっても計画課題を遂行すること、それが最高の成果ということだったのである。イノベーションへの何らかの刺激というものは存在しなかった。現在我々は科学技術の進歩が一番重要であることについてよく認識している。しかしソビエト時代の工場長や技師長は新技術の設計者や開発担当者に対して何をしていたというのだ。私はまる11年 Gosplan つまり国家計画委員会のなかで働いていたが、新しい技術を導入するにはどれほど強圧が必要だったのかをこの目で見てきた。ところがそれが今の正常な市場経済の下では絶えず生産過程に注ぎ込まれているのだ。ちなみに低い生産技術水準は低い労働生産性をもたらし、それはまた大多数

の住民の低い生活水準をもたらした。ソ連では賃金の割合は50%弱、工業部門では35%で、マルクスの定義に従えば搾取率はそれぞれ100%、200%となるが、米国ではそれが総じて70%弱だった。ソ連は労働者と農民が自分達自身のために働く国だと宣言されていたが、しかしこれがソ連式社会主義モデルの実態だったのである。ソビエト経済学は資本主義の全般的危機ということを宣伝したが、実際にあったのは社会主義の（とくに1970年代末から始まった）全般的危機であった。

従って私の結論はただ一つ。マルクス・レーニン主義経済理論は19世紀前半、部分的には19世紀中葉、ロシアでは19世紀末から20世紀初頭にかけてふさわしいものであった。この時期にポリシェビズムが革命の道を進んだ。しかしその他の世界は社会民主主義の考えを実行した。ロシアも結局はゴルバチョフのペレストロイカ以降の改革によって文明発展の大道に戻ったのである。

L. ワーシナ（経済学博士候補、ロシア国立社会・政治史文書館先任専門員、同館 MEGA 班主任）

アナニン氏は現代西欧におけるマルクス関係の社会科学の幾つかの方面について指摘したが、一つ落としたのはロシアではマルクス学と呼ばれている分野についてである。この分野の基本的成果の一つはアカデミー版の MEGA の出版で、これはマルクス・エンゲルス国際財団の下でロシア、ドイツ、オランダ、日本、アメリカ、デンマーク、フランスの研究者達の努力によって続けられている。

今日の討論会の中で『資本論』第2、3巻の出版におけるエンゲルスの役割について議論された。実際1990年代に『資本論』の出版におけるエンゲルスの役割がドイツ、日本、ロシア、アメリカなどで活発に議論された。しかしエンゲルスがマルクスの原文の内容を本質的に変更したとする見解は、V. ヴィゴツキーと W. ヤーンの論文によって反論された（MEGA-Studien, 1996 / 1, S. 117-126.）。この問題についての新しい資料が2003年末に出た MEGA 第2部 XIV 巻にある。また今年新しい資料などを盛ったコメントールをつけた『資本論』第3巻のテキストが入った MEGA 第2部 XV 巻が出版される。

このような資料を見れば、マルクスが、ジェボンズやメンガーの著作の出現に伴う限界革命によって世界観の危機に遭遇して、『資本論』の第2、3巻のための仕事を止め、生涯その仕事には実際戻らなかったと言う主張は全く根拠薄弱で成立しないと考える。ちなみに1882年末の日付のある最後のノートなどマルクスが残したノートの圧倒的多数は多かれ少なかれ『資本論』の完成の計画と結びついているのである。

人類の知識の歴史からマルクスとその思想を抹殺することは出来ないだろう。最近15年の間ロシアの社会科学とその教育過程からマルクスが事実上除外されてきたことはまことに残念である。どんな分野で働く専門家でも、そこでの継承性の喪失は償い難い損失をもたらすということに同意するだろう。真理は一度完全に壊されてしまえばそれを再興することは可能ではあっても非常に難しいものである。

[以上は『経済の諸問題』誌、2005年1月号に掲載されたもの。以下は同誌、同年2月号に掲載されたものである。]

Yu. ヤクーチン（経済学博士、『エコノミーチェスカヤ・ガゼータ』出版所学術部長）

最初にこの討論のなかで出た見解について一言。今のロシアの若者はマルクスの著作について知らないが、我々がソビエト時代の経済学の遺産から解放されようとしているのは良いことだという発言があったが、これはとんでもないことだ。この討論会には若い学者、大学院生、学生が参加しており、彼らは討論会のテーマに関心をもっており、現代的観点からマルクシズムを研究しようとしているのである（小檜山注。討論会出席者についてのこの指摘は前のチェブレンコ氏の発言と食い違っているがどちらが正しいかはその場に居合わせなかった私にはわからない）。また今日まで中国や東南アジア諸国でマルクシズムの研究が続けられているし、さらにアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどの多くの錚々たる大学でマルクスの『資本論』や彼の哲学的著作が教科の中に入っていることを忘れてはならない。

ところでこの討論会が何故開かれたのかといえば、それは現代の経済理論が現代の根本的諸問題に回答を与えることができないので、われわれはその答えを過去の経済学者達の方法論的アプローチのなかに求めざるをえず、そのためにいま学界にマルクシズムに対する関心が高まっているからなのである。ところでマルクスは当時の世界の経済構造を形成していたカテゴリーと法則の整然たる体系を作った。しかしその中の多くは古くなり、多くは時の試練に耐えられなかった。例えばマルクスは社会が二つの階級から成るということを前提にしたが、今日では社会はずっと複雑になっている。従って我々にとって貴重なのは抽象から具体へと進む分析の仕方や研究の統一性、体系性などの彼の方法論なのである。我々が生産関係を研究する科学としての政治経済学（小檜山注。ここで使われている「政治経済学」という言葉は我国で「経済原論」とか「経済学原理」などと呼ばれているものに近い）について論ずる場合には、マルクス政治経済学が経済的現実の分析のための確かな方法であり、また用具なのであることを強調しなければならない。この討論会のテーマは大学の経済学関係の科目の中の、また今日の経済学の体系の中の政治経済学の位置と役割についての議論と不可分であるが、ここでのマルクスの遺産についての議論の結果大学の教科のなかに政治経済学を置くことを主張する人々の立場が強まったとすることができるだろう。

もちろん今の我々の経済学は、かつて党の指導者達の注文に従ってその政治的決定やスローガンを理由づけなければならなかった時代のソビエト経済学の諸悪に染まっていたことを認めなければならない。だがそうはいくもの一方で現在、市場への移行という新しい途の“革命的”妥当性を裏づけようとするトグマや作り話がなんと多いことだろうか。実のところ新しい経済学（エコノミカ）にあるのは新版のポリシェビズム、生起する諸問題に対するかつてと同じ“急襲”，かつてと同じ異見に対する不寛容、昔と同じ真理と事実を直視しようとしぬい姿なのだ。今のロシアの学問は現代の切実な問題に対して解決の方途を与えることができない、何故かといえば、そこでは経済学の体系の核心でありその根本である政治経済学が抜き取られているからだ。政治経済学では生産関係が研究の対象であり、経済現象や過程を分析するための支点である。労働を組織する形態や方法、生産手段は種々様々である。しかし人々の間の生産関係というものは常に存在する。従ってそれを研究する経済学の部門というものも常に存在するだろう。それは生産関係の諸法則、その歴史的諸形態、生産力の発展や人間の発展に対するその影響を分析するものだ。現代経済学が時代の要請に答えていないのは経済現象や過程の本質を把握しようとしていないからだ。

経済学には色々な分野がある、基礎的、実際応用的、具体的分野などだ。しかしこれらの多様な分野、部門はみな共通の経済理論の基礎の上に成り立っている。そしてここで我々はマルクスに向かわざるをえない。彼は『資本論』の中心は生産関係の研究であることを認めた。確かにマルクスが述べた多くのことは既に古くなった。例えば以前のようなあくどい社会的対立も、妥協不能な難問もなくなった、労働者階級も資本家階級も社会の構造も変わった。だがこのような変化にもかかわらず、依然として生産手段を所有し、管理し、それをもとに必要な商品やサービスを生産している人達がいる。従ってその役割に応じていろいろ違った種類の人々、すなわち所有者、管理者、利用者、従業員、消費者…の間の関係が存在する。だが今のロシアの経済学ではこれらの生産関係はすべて誰のものなのかが分からないままなのだ。生産関係の分析をしようとしていないから、今のロシアの経済学では国家所有の本質、賃金や所得の本質はなにかなど、多くの根本的な問題に答えることができない。また我々は自然資源や社会的産業インフラストラクチャーの利用について公正な社会的利益を守るための正確な経済政策を作成することもできないのだ。

もちろんかってマルクスの学説がいかに政治闘争の中で利用されたかを想起することは必要である。けれどもそれはマルクスの遺産を研究する際の別の一つの問題である。今のロシアの経済学の状態を考える場合に極めて重要な方法論の面では、生産関係に関する今日の主要な問題が根本的な意義をもっているのである。

Yu. オリセービッチ（経済学博士、教授、ロシア科学アカデミー経済研究所主任研究員）

最初にこの討論で出されている科学、政治、および“宗教”に関する問題について少し意見を述べたい。学者としてのマルクスの偉大さは議論の余地はないし、またイデオログ、政治的闘士としての彼の目的志向性、非妥協性についても議論の余地はない。また彼の著作の中で一方で科学、他方でイデオロギーと政治が相互に浸透していることもまた明白である。しかしながら一般的に言って科学と政治はお互いに相容れることのできる相互に矛盾の無いものなのであろうか。確かにマルクスにとってはそれは矛盾が無いばかりではなく、ひとつの階級——ひとつの党——ひとつのイデオロギー——ひとつの科学的理論として切り離すことが出来ないものであつた。だがしかし問題は単に相互浸透ということではすまされないだろう。『共産党宣言』は『経済学批判要綱』や『資本論』のずっと以前に現れたものである。政治は理論の母となり、科学とは大きく違ったその遺伝子を理論に伝えたのである。

『資本論』四巻は聖書にも似て全宇宙であり、厳しくもまた魅力的なものである。著者の力強い姿は現実を覆い隠し、戦後の西欧の繁栄さえも我々を覚醒させなかった。現実に戻るためには、社会主義の崩壊、史上最大の地政学的体制の崩壊、そしてなお何世紀にもわたったロシア・ユーラシア超民族体の解体が必要だった。しかしこれらの事態は我々を客観的分析の領域外に投げ出してしまった。だが今我々は既にもはや親マルクスのではなく、反マルクスのとなった教養ある我が国民の偏見を克服すべくこの領域に踏み込まなければならない。この討論がそうした方向への一歩となることを期待するものである。歴史は前へ進んで行く、今日マルクスは遠い時代の人となった、それが今初めてマルクスの理論を実際の現実とまた他の学説と冷静に対比する可能性を作り出しているのである。

確かに西欧には少なからぬマルクシストやマルクス学者がいるが、今日ロシアほどよくマルク

スが知られている国はないだろう。ただし我々の知識は特殊であって、我々はマルクシズムを神聖なものの前で心を震わせるようなある種の気持ちで受け入れてきた。我々にとってそれは整然とした完璧な一枚岩のように揺るぎのない教えであった。レーニンはそのように教え、我々自身もそう考えようとしてきた。しかし愛情と憎悪は紙一重である。今日まさにこの“揺るぎの無さ”、“決定論”に幻滅した崇拜者達はマルクシズムを或いは歴史のごみ捨て場に或いはニュートンやダーウインと一緒に古代のパンテオンに送り込もうとしている。それは思い切った考えだが、しかし別に新しいものではない。そんなに急ぐ必要があるだろうか。それよりも西欧や日本の多くの著名な学者達がずっと以前から既に行なっているように、冷静にマルクスの学説の研究にとりかかった方がよいのではないだろうか。

マルクシズムにはそれを“整然とした”とか、“一枚岩のように揺るぎのない”とか、さらには“決定論的”な学説であるとかいった風に一面的に特徴づけることは許さないところの、幾つもの側面があるのを指摘することができる。まずマルクシズムが二つの相互排斥的な立場に貫かれているという点から始めよう。その二つとは一定の政策の用具としての理論を作り出そうという願望と、政治の基礎としての科学から出発しようとする志向の二つのことである。（ちなみにマルクシズムの立場の中のこの矛盾は、著名な科学論者 M. ボランニイが1935年にモスクワでアカデミー会員 N. ブハーリンとソビエト社会における科学の地位について語り合った時に彼を驚かしたものである）。

第一の立場からはすべての経済理論が対立物つまり相互排斥的な要素の闘争という構造をもつことになる。だが第二の立場からは発展の多様性を許すことになる。すなわち第一の立場からは価値は効用に、剰余価値は労働力の価値に、資本家は労働者に、私的所有は社会的所有に、市場は計画に、競争は協働に、大企業は小企業に、資本主義は社会主義にそれぞれ対立しておかれる。単純な否定ではなくて弁証法的な否定ではあれ、これは全面的な相互否定である。このような弁証法がどこから“芽生えた”のかは想像に難くはない。18世紀末から19世紀前半にかけて西ヨーロッパでは広範な大衆の状態は明らかに悪化し、周期的恐慌は激しさを増し、革命が次から次へと起こった。しかしながら科学的な論理と深部の諸傾向の分析はマルクスをして同時にまた全く別の可能性をも考えさせるようにしたのである。以下それについて述べよう。

一時的、過渡的にしか意義をもたないことのために、人々を闘いに立ち上らせ犠牲、困窮を求めることは難しい。だからあらゆる革命的理論はつねにただ“恒久的な”、“例外を許さぬ”法則や原理を明らかにしようとするのである。だがしかしまたあらゆる本物の学者は、まして「私はただ一つの学、歴史の学を知るのみである」（小檜山注。これは『ドイツ・イデオロギー』のなかのマルクスの言葉を指しているであろう。大月書店版邦訳マルクス・エンゲルス全集、第3巻、p. 14参照）と宣言した学者は、そのような一般的な原理や法則がいかに少ししか存在しないか、また歴史は時間的、空間的にいかに変化しやすいものであるのかを知っている。それなのにまさにマルクスの政治活動が彼を誘って部分的、過渡的なものを一般的、恒久的なものへと変えさせてしまったのである。だが同時に学者マルクスは常に政治的闘士マルクスに抵抗していた。もちろん通常は政治家が勝利したけれども、この内的葛藤のはっきりとした痕跡がマルクスの理論的な著作、論文、書簡の多くのページに散在しているのである。

次のことをここで強調したい。（我が国の政治経済学者にとって標準的な）マルクスの理論の中に疑いもなく科学的な要素が存在していることを認めるのは、今更特別に新しいことでもない。

W. レオンティエフ、A. エルリッヒその他の西欧の経済学者達もそう述べて、産業循環の概念、再生産表式、経済発展の概念などを指摘している。けれどもマルクスの著述の中にはそのほかに、周知の彼の理論とは原理的に違ったそれとは対照的なアプローチの仕方をもった諸要素が観取できるのではないかと私は考える。例えば次のような問題がある。

標準的なマルクス理論では経済的“土台”が政治的“上部構造”を規定するとされている。けれどもそのマルクスによれば、普通選挙権は私的所有を破壊するとされる。標準的マルクス理論によれば人間の本質は社会関係の総体によって規定される。我々はこの関係を変えることによって始めて“新しい人間”となることができるとされる。けれどもマルクスはそれと並んで“人間の本性”，その“本質的な力”の展開等々について述べ、はっきりと人間を本源的なものとして見做し、決して具体的な社会体制の派生物としては見ていない。マルクスは労働価値論の立場に立って国民の生活を維持するためには人々の不断の労働活動が必要だと説いた。けれども同時に彼は将来は科学が生産の主要な要素となり、商品の価値は労働の支出で決められることはなくなると考えていた。言い換えれば労働の必要性はなくなることはないけれども、労働は価値の恒久的な実体ではないということである。価値そのものは決して生産関係の変革の結果ではなく生産力の変革の結果として消滅するだろうということだ。またマルクスは一面では労働が生活の第一の欲求となることを期待していたが、他面では社会の主要な富はその成員の労働時間ではなくて自由な時間であるという結論に達していた。マルクスの理論は賃金の運動は労働力の価値と絶対的、相対的剰余価値の生産によって規定されるということ仮定していた。だが同時に彼の意見によれば労働運動の発展は賃金を決定する全く違った諸法則を生み出すことができるのである。

これらに類するマルクスの“オルターナティブ（もう一つの選択肢として考えられるもの）”な発言をまとめてみよう。それは、歴史は人間がもともと持っている本来の力つまりその創造力をますます完全に開花させるだろう。科学技術革命は次第に価値や市場を廃止し、資本主義は崩壊する。普通選挙権は私的所有を破壊し、労働組合の成長は雇用労働の搾取を終わらせる。労働日は短縮され、自由時間が増える等々ということになる。

我々はここで彼の標準的な理論を全く完全に否定するようなマルクスのコンセプトにぶつかる。これは『資本論』の第1巻と第3巻の間の矛盾などのようなマルクス理論の中の矛盾とされているのとは全く違う種類の矛盾である。これはまた20世紀初頭に社会民主主義者と共産主義者の間の理論的分裂、また後者の中のレーニン主義者とスターリン主義者の間の分裂をもたらしたあのマルクシズム内部の矛盾でもない。またここではプロレタリア革命が生産力の完全な成熟の以前に、一国で、民主的な方法で勝利できるか否かといった種類のことが問題になっているのでもない。マルクスの“対照的な”コンセプトの枠の中ではそもそも革命は経済的諸問題の解決の手段としては不適当なのである。マルクスのこのような“対照的”コンセプトの基礎には決して“マルクスの”ではない観念が横たわっている。それは人間の本性が社会認識の出発点であり、土台は決して化石化したような制度ではない（民主的社会においてはそれは生産力、文化、政治の変化の影響を受けて変形する）という観念である。

マルクスは社会の発展について対立する二つのコンセプト、二つのアプローチを提起している。何故かといえば私の見るところ彼は第一に、多くの原因、結果がその処を変え、二次的な要素が自然に規定的な要素に変わり、運動のベクトルが変化する際に起こる、発展のなかの“分枝”や

屈折の可能性というものを理解していた。第二に彼は自分の主要な理論構造の政治性（言ってみれば我々は資本の経済学ではなくて労働の経済学を作るのだというような）を自覚していて、諸問題にたいする自分の科学的なビジョンを大まかに記しておこうと考えていたのである。はっきりさせておきたいのは、マルクスの“対照的”コンセプトは単に“初期マルクス”に帰せられるものではないということである、勿論その根元の若干は確かにそこに遡及すべきものだろうが。しかしながらこれは成熟したマルクスの成熟した考えである、確かにそれは19世紀後半の階級闘争のなかのマルクスの標準的な理論によって“後景”に押しやられてはしまったが。

さてそれでは我々は学者マルクスにどのような不満を述べることができるだろうか。彼の根本的、基礎的理論は現実から遠く離れた人工的抽象であったとして非難することができるだろうか。恐らくそれはできまい。そもそも労働時間が10—12時間続き、大多数の労働者の賃金が物理的生活最低限に等しく、生産の決定的要素が生きている人間の労働の量であり、蓄積は技術的進歩によるよりも消費の制限によって行なわれるといったそのような歴史的環境に照応して『資本論』の理論的モデルが作られているのである。

それでは我々はマルクスが、この経済体制が別の作用・発展の諸法則をもった質的に違った体制に、順をおって次第に非暴力的な方法で変革を遂げていく可能性を予測しなかったとって彼を非難することができるだろうか。上に述べてきたことからすればこのような非難をする根拠はないと思う。しかし恐らくマルクスはこのような可能性はあまりありそうもなく、かつは望ましくもないと考えていたのだろう。マルクスにとっては地代論の細部を磨き上げ、再生産表式のいろいろなバリエーションを計算し、資本の各種の要素の循環を研究するために時間を費やすことが重要だった。そのために資本主義の変革の原則的な可能性を認めたマルクスに変革の理論そのものはなかった。もつとも資本主義のもっている基本的な点から割り出してこのような理論を作り上げることはさほど難しいことではないのではないかと私は考えるが。問題は何よりもまず賃金、利潤、租税（すなわち労働者、企業家、国家の所得）という三部門の調整の理論；独占、寡占、独占的競争についての理論；国家の経済的機能と国家の経済調整についての理論；所有関係の進化についての理論等々であろう。

実はそれどころかマルクスは彼の支持者達が資本主義変革の問題に取り組もうとした時に否定的な反応を示したのである。もし彼が資本主義の平和的変革の理論を展開していたならば、彼は共産主義の第一段階について（『ゴータ綱領批判』とは違った）もう一つの別のバリエーションも考えなければならなかっただろう、その場合そこには100年後マルクシスト鄧小平が行なったように多数ウクライド（経済組織）制、市場、グローバリゼーションの問題を組み入れなければならなかっただろう。けれどもここで科学の利害が政治的執着や目的と衝突したのである。学者としてのマルクスはいろいろな発展のバリエーションの可能性を見ていたが、しかし彼はイデオロギー上の必要のためにただ一つのバリエーションのみを作り理論づけたのであった。私の意見ではまさにここに学者マルクス及び多くの社会学者達に対して向けることができる非難の主要な点（主要なしかし唯一ではないと括弧して付け加える）があると考えてるのである。

歴史を階級闘争と生産様式の暴力的交替に帰着させてしまう“史的唯物論”は19世紀中葉の西欧の政治状態を過去に当てはめよう（また将来に引き伸ばそう）とする志向から生まれたのだということを理解するのは難しくはない。ただし当時の政治状態のもっていた一連の特徴を歴史は確

かにそこここで繰り返しており、また我々の将来もそこに戻らないとは保証できない。ちなみにこの点に注意をうながしているのは、他ならぬ現代のマルクス批判家ローマ法王ヨハン・パウロ2世である。彼は1993年9月に「共産主義イデオロギーの中にある種の“真理の種子”が存在することを認めないで、見境なくそれを否定してはならない。このような真理の種子のためにマルクシズムは西欧社会にとって人々をひきつける存在となることができたのである。」と声明した。当然マルクシスト達も非マルクスのイデオロギー一般、またその中のキリスト教の中にもある種の“真理の種子”が存在することを認めなければならないだろう。

政治闘争は社会科学全体の原動力であるばかりではなく、またそこに参加する学者各人にとっては枷でもあるのである。従って社会思想の諸潮流、諸傾向の総体のみが我々に社会の状態とその諸傾向の多かれ少なかれ現実に即した姿を示すことができる。政治的先入観を非難することは先見性のなさを非難することを意味しはしないのである。

これまでのところ社会の変革過程の転換を予見することは誰もできなかった。このような第一の転換点は19世紀末—20世紀初頭に起こり、社会化と独占化という対立した標識をもった二つの用語で特徴づけることができよう。第二の転換点は第一次世界大戦と1929-1933年の恐慌の後に起こったもので、社会化が継続する中で経済の国家化が進行したことである。第三の転換点は1970年代末に始まり、市場構造の脱独占化とグローバリゼーションの展開を基礎に非国家化が始まったことである。

J. シュンペーターが言ったように、このような転換点を予見するという課題を科学に与えることは非現実的である。なぜならばそこにはいろいろ違った深度、強度、継続性をもった余りにも多くの不確定な要素が作用しているからである。ここから出てくる結論は真の学者は預言者には適さないということである。科学の課題はこのような転換にそなえて考えられうるシナリオを作り上げ、そのメカニズム、そこから生まれる結果について、またそれに対する適応と危機回避のための調整方法を明らかにすることである。さて私は次のような質問をもってこの発言を締め括りたい。最近百年の経験をもとに、今の世代が2020-2030年代に出会うであろう社会変革上の新しいグローバルな転換について、その幾つかの可能なバリエーションを予測することは果たして可能であろうか。

G. ルザービン（哲学博士、ロシア科学アカデミー哲学研究所主任研究員）

ガイダール氏らはマルクシズムの発生の社会経済的諸条件を詳しく考察し、マルクスの後継者達が加えた補足、修正を明らかにしている。そこでの歴史的事実は十分に詳しく述べられ、結論は説得力を持っているように思われる。

私は、マルクスが“鉄の必然性”をもって貫徹するとした経済法則について述べたい。ガイダール氏らが指摘しているとおりマルクスは晩年このような法則観に懐疑的だった。しかしこれは当時の自然科学では厳密な決定論的考え方が支配的だったことと関連している。このような決定論的法則によれば、後続の体系の状態は先行の体系の状態に正確かつ一義的に決定されるのである。このような法則の典型的な例がニュートンの万有引力の法則である。。この法則によって天体の運動の軌道、太陽と月の没する時間、満潮・干潮等が非常な正確さで決定された。確かに当時既に確率統計論的研究方法が使われてはいたし、ランダムな大量の事象を記述する確率的諸法

則も定式化されてはいたけれども、しかし学者達は確率的法則を決定論タイプの法則に帰着させることができると思っていた。それが出来ないと分かったのはやっと20世紀に量子力学ができてからであった。

社会の進歩発展の線型的性格の問題についても科学の発達水準から考えてみる必要がある。非線型的システムの問題については20世紀にシステム一般論、サイバネティクス、相乗作用論が生まれてから初めて語られるようになった。確かにマルクスとその後継者たちにも、螺旋的發展などといった社会システムの複雑な性格の発展についての直感的な観念は見受けられる。しかし古典的な科学ではこうしたカテゴリーの正確な規定は存在しなかった。従ってマルクスに向かって社会経済システムの非線型的発展の厳密な規定や説明を求めることは出来ない。そのためには非線型的システムの正確なモデルが必要であったし、今でもそのような規定を作り上げるのには大きな困難が伴っているのである。

ところでノース（D. C. North）がマルクスの遺産の中から現代経済学に興味のある諸要素を取り出し、社会制度、所有権、国家、イデオロギーという新古典派に欠けているものに注目したのは正しい。新古典派の人達は個人の選択が常に社会的厚生の上をもたらしから合理的であると執拗に主張し続けているが、現在ではこうした考えは幻想にすぎないということをJ. ソロスのような有名な経済人も言い出している。

A. ブズガーリン（経済学博士、モスクワ大学教授）

ロシアの中心的な経済誌の主催でマルクシズムの基礎的な理論としての意義が討議されたという事実そのものは、それ自身意義のあることである。まして最近何十年もロシアではマルクシズムが“忘れ去られ”，多くの点で二次的、周辺の学問となっていることを考えれば、この討論会は更に大きな意義をもつことが分かる。

21世紀の理論と実践の主要問題の解決をめざしてマルクス主義の歴史哲学と経済学の創造力を展開していくという点に関して私の意見を述べたい。討論参加者のいくたりかが、マルクシズムこそが経済という現象についてよく考えぬかれた統一性のある説明を与えていると強調したが、それは全く正しい。

第一にマルクシズムは人間の価値と行動がその法則に従っている客観的な経済過程（生産力と生産関係の発展）と、歴史の創造者（単に合理的に行動する生産者、消費者だけではないところの）である人々の主体的行動の弁証法的統一に基づいている。その際マルクシズムは、新古典派に無視されている技術組織の動態、経済の部門構成、労働の内容、人間のタイプ、政治と民族的・文化的特性の経済への影響等々の問題を重視しながら、物質的・技術的、社会・経済的、政治・イデオロギー的諸領域の現実的相互作用を研究している。

第二にマルクシズムは経済を歴史的に取り扱う。だから経済体制やその中のサブシステムを区分して幾つかの型に分ける際の客観的で科学的な基準を明らかにすることができる。特に市場経済について、その歴史的発達水準、社会・政治的、文化的特性等々に基づいて、それを幾つかの種類に区分けすることが可能になる。それは更に市場及び経済一般の批判的識別（この問題での混同が今の多数の理論家達によくあることだ）の基礎となるのである。

第三に経済体制の発展とその質的相違についての命題を基礎としたマルクス主義的方法論こそ

が、ポスト・ソビエト的変革の主要問題の分析に最も適していたのだ。実際に改革のプロセスに関する議論の中で最も大きなものは、まさにマルクシズムが中心的なものとして提起していた諸問題に関わっていたのは、理由のないことではない。そのような問題とは市場的要素と意識的な社会的規制の相互関係の問題、所有の内容と形式の問題、社会的公正さと資本に対する制限の基準の問題等々である。確かに新古典派もこうした諸問題の存在を認めて間接的に触れてはいるけれども、それらを最も深く研究しているのはマルクシズムであって、この点是新自由主義的な改革者達も“現実の社会主義”の諸関係の“起点となる”（自由化のこと）、また“基本的な”（私有化のこと）撤廃を“改革”の基本的課題として掲げたときに事実上認めなければならなかったのである。

第四にネオマルクス主義の方法論が現代グローバル資本を解剖して、グローバル化しポスト工業化経済に移行しつつある経済に特有な商品生産の自己否定（“インターネットの全面的なヘゲモニー”）、貨幣（“バーチャル”金融資本）、また資本（労働だけではなく人間の資質や自由時間の資本への形式的、実質的従属）の新しいメカニズムを解明することができる。

最後に現代マルクシスト達は、新古典派の方法と理論に一方的に固執している大多数の同僚達とは違って、原則としてお互いの理論を豊かにするための他の諸学派の代表者達との対話を歓迎する。この点は現代マルクシスト達の著作を広く調べればある程度分かるだろう。我々は、ポスト近代派の理論的“何でも食い”の立場でもなく、理論と方法に無関心な実証主義の立場でもなく、実際に真理の探究を目指しているいろいろな学派の積極的に弁証法的な協働が必要であるという立場から出発している。その真理とは、合理的な購買者と販売者の行為というようなモデルに原理的に帰着させることはできない経済生活、我々の眼前で発展し変化している、劇的な社会的葛藤に満ちた具体的な経済生活についての具体的な知的発見ということである。

『経済の諸問題』誌ではここで A. コルガーノフ氏（経済学博士，モスクワ大学経済学部前任研究員，ブズガーリン論文の共同執筆者）および L. グレブネフ氏（経済学博士，教授，モスクワ大学経済学部主任研究員）の発言を掲載しているが、本稿では紙数の関係で両氏の発言は省略する。]

V. マウ（経済学博士，教授，ロシア連邦政府付属国民経済アカデミー学長，この討論会の発端となった論文のガイダール氏との共同執筆者）

私とガイダール氏はマルクスそのものについて、さらにはまたマルクシズムについてさえ執筆しようとしたのではない。マルクシズムの中で重要でアクチュアルと考えられることを基にして、社会・経済の発展の諸問題について論じたいと思ったのである。始め私は今マルクシズムについて議論するのに興味をもっている人は多くはないだろうと思っていたが、嬉しいことにそれは間違いだった。

ところで自由主義と、自由主義者のマルクシズムに対する関心について若干述べたい。私の考えでは自由主義には二つのタイプがある。その一つは哲学的、イデオロギー的なもので、個人の利益を集団や国家の上に置くものである。この点で自由主義は社会主義（ないし集団主義）に対立する。この意味では自由主義は個人の内的な選択の問題である。

しかし他方、経済的自由主義というのは全く別の問題である。自由主義的経済政策の有効性というものは歴史のその時々 conditions に照らして判断しなければならない。私が自由な社会に住むことを好むからといって、自由経済が中央管理的経済よりも常に有効だということには全くならない。マルクスの学説に従えばどっちが有効なのかの問題はその時代の支配的な生産力の性格に依るのである。それで教条的マルクシストでない限り現代の生産力が自由主義的経済政策を必要としていることを理解するのは難しくはないだろう。だからこそ現代の自由主義者はマルクシストたりうると私は考えるのである。だからこそまた我々にとってマルクシズムの中で今何よりも重要なのが歴史主義、まさに現代社会の状態とその発展傾向について興味深く重要な結論を導きだすことができる場所の歴史主義なのである。

なお予測の問題について簡単に述べておきたい。我々はマルクス主義的方法論に基づく予測の有効性を決して過少評価するものではない。例えば1871年にマルクスが行なったヨーロッパの戦争の性格についての予測は素晴らしいものだった。けれども予測の可能性には限界がある。理論的予測の可能性が大幅に狭まる転換期（数十年にわたるもの）というものがある。工業化社会からポスト工業化社会へ移る現代はまさにそのような転換期なのである。

最後に私は我々の執筆した論文の意義と目的は次の一句で表わせると言いたい。それは真の自由主義者たりうるのは、人類が作り出したあらゆる知識の宝庫によって自己の考えを豊かにした場合のみであると。

L. アバルキン

この討論は当分終わりそうもないが、我々はこの討論会を開くことによって、十分大きな問題関心を引き起こすことができた。この関心は消えることはないと思う。我々は皆さんの力を借りて、マルクシズム、その過去、現在、未来について専門的に語ることでできる外国のパートナーの方々も討論に誘い入れるよう努力したい。今日ここで何らかの総括を行なうつもりはない。『経済の諸問題』誌編集部は勿論のこと誰も絶対的真理を担うと自任することはできない。我々はともに真理を探究し、マルクスの遺産のいろいろな側面を解明していこう。それは我々を現実についての広範で体系的なビジョンに、また社会科学の新しいパラダイムの作成に近づけるだろう。

マルクスと我々の時代の間には20世紀が横たわっているのを忘れてはならない。マルクスとエンゲルスが著述を行っていた頃には、第一次世界大戦も第二次世界大戦も、核兵器も住民の膨大な犠牲も、現代テロリズムその他も誰も考えも及ばなかった。我々は社会の進歩が直線的なものだという観念を抱いて暮らしてきたし、また今もしばしばそうしている。しかし現代のパラダイムは、いろいろなオルターナティブな社会についての考え、社会発展の各種バリエーション、人間の知識についての多元主義、文化・宗教・教育・環境の諸領域におけるすべての要素を考慮にいたれた多次元の社会発展といった概念をその中に組み込まなければならない。我々は新しいパラダイムの誕生を期待している。マルクス遺産の中から何がそこに入り得るかという問題は、目下のところ将来に任せるしかない。

[未完]